

としてまとめられる。

また、儒教的祭祀であるチェサは民族性の象徴であると同時に、女性差別の象徴ともいえる側面があった。しかし、今回の聞き取りからは、儒教的家父長制に基づく家族像は、女性を含めた個人を尊重する家族像へと変容しているとみられる傾向も見出せた。

朝鮮学校教員家族によって実施されているチェサは単に祖先祭祀を通して民族的なルーツを意識する機会であるだけでなく、普段は顔を合わせることの少ない全国各地に散らばった親族が集合して故人の思い出や近況を語り合える場として認識されていた。朝鮮学校教員家族においてチェサは何らかの形で行われていた。それは引き継がれるというよりも、在日朝鮮人家族として新たに作り出されてきたチェサという側面があった。

朝鮮学校教員家族にとってチェサは、家族の結束を確認する場であり、かつ「朝鮮人」であることを確認する場であるといえる。また、チェサをそれぞれの事情に照らして変容させていく過程は、日本社会の中で自分たちの生活を守りながら、新たな家族を形成していく過程でもあると考えられる。

最後に、本調査の最終的な目的は、チェサに焦点をあてて在日朝鮮人家族の祖先祭祀のあり方と家族の現状を明らかにすることであった。しかし、本発表で示すことができたのは、朝鮮学校教員家族という限られた人々の状況である。今後は、異なった立場にある多様な在日朝鮮人家族のチェサの実情を明らかにすること、その全体像が見えてくるのではないかと考えている。

パネルの主旨とまとめ

櫻井 義秀

一 宗教文化のトランスナショナルリティ

昨今、グローバル化の進展と共に宗教文化の越境性(トランスナショナルリティ)が研究されてきている。移民・難民を含む国際的な労働力移動に加えて、世界宣教に力を注ぐ既成宗教・新宗教があり、さらにバーチャルなスピリチュアリティ空間の拡大によって、特定の地域的空間や民族・歴史的伝統に固有なものと考えられていた宗教文化が異文化圏へ浸透していつている。

本パネルでは、現在、発表者たちが進めている東アジアにおける宗教文化の動態調査のうち、この二、三〇年に限定した韓国と日本の宗教文化交流に焦点をしぼり、調査研究のあらましと知見の一部を報告した。

二 調査研究の経緯

本研究は、韓国側・日本側の研究者がほぼ一〇年間の共同作業において構築してきた調査研究の一部である。韓国側の調査は、東西大学教授李元範を中心とした韓国学術振興財団人文社会分野支援国内外地域研究助成「日韓宗教の相互実態に関する調査(二〇〇三―四)」日本大衆文化開放による日本系宗教の教勢および受容者の意識変容に関する調査(二〇〇四―五)による。日本側は櫻井義秀を中心として科学研究費基盤研究(B)(一)研究課題番号一六三二〇〇一〇「カルト問題と社会秩序―公共性の構築に関わる比較社会論的検討―(二〇〇四―六)」と萌芽研究(研究課題番号一九六五二〇〇六「日韓宗教文化の

混在における葛藤とめぐみ（二〇〇七—八）」によって、計六年がかりで調査を行ってきた。

日本側の研究者にあった問題意識は次のようなものであった。なぜ、反日教育・感情が根強い韓国社会において日系新宗教、特に日蓮主義の創価学会が韓国第四の宗教勢力となるほど信者を獲得できたのか。なぜ、韓流ブーム以前、韓国への差別意識が強い日本において韓国のキリスト教系新宗教や福音派教会が日本の主流派教会を凌ぐほどの教勢拡大に成功したのか。

従来、このような宗教動態は必ずしも正確に理解されていなかった。したがって上記の問いに対して、宗教文化の土着化論や海外布教の戦略論、及び、ホスト国の政教関係や宗教市場、布教の機会構造から宗教文化交流のメカニズムを探るような研究は、韓国、日本、その他の国の研究者によってもなされてこなかった。本発表はそのような研究の隙間を埋め、さらに宗教文化のトランスナショナルリティに関する宗教理論の産出に寄与したい。

この度は時間の関係で調査の概要を素描するに留まるが（研究成果は二〇一一年に書籍として刊行済み）、韓国側から韓国における日本の新宗教による布教の動態とメディア報道の特徴、日本側からは韓国系キリスト教会の宣教と在日コリアンにおける先祖祭祀の現状を報告する。なお、司会の櫻井は調査全体の宗教研究における意義を総括的にまとめ、コメンテータの田島は現代宗教社会学の観点から本研究の意義や課題についても言及した。

三 書籍の刊行

櫻井義秀・李元範編著『越境する日韓宗教文化——韓国の日系新宗教 日本の韓流キリスト教』北海道大学出版会、二〇一一年、A五判・上製・五〇〇頁・定価七三三〇円（税込）。

韓国語版 이원범, 사쿠라이 요시히데 지음, 二〇一一, 「한일 종교문화 교류의 최전선」——일본의 한류와 한국의 일류」인문사（李元範・櫻井義秀編、二〇一一、『韓日宗教文化交流の最前線——日本の韓流と韓国の日流』人文社）、A五判・全五六二頁。

アジアの宗教と教育

代表者・コメンテータ・司会 西尾秀生

戒律規定と沙弥教育

龍口 明生

はじめに 周知のごとく戒律規定を叙述する諸種の律蔵の主たる目的は比丘（および比丘尼）の僧伽の一員としての生活規則ならびに僧伽の運営の規定を詳述することであって、沙弥に関連する規定については多くは語られていない。従って沙弥の教育を考察するには間接的に推測せざるを得ない場合もある。

一、僧伽の構成と沙弥 仏教教団は四衆あるいは七衆で構成されている。四衆とは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷であ